

## 膝蓋骨脱臼

膝蓋骨とは「膝のお皿」のことで、正常な解剖学的な位置は、大腿骨滑車に収まっている状態です。これが内方あるいは外方に脱臼する状態が膝蓋骨脱臼です。この疾患は猫では希なのですが、トイ種およびミニチュア種の犬での発生は多く、そのほとんどが先天性です。また、犬の膝蓋骨脱臼の75%以上が内方脱臼で、両側とも脱臼するものが50%とされています。

### 症状

初期のうち、脱臼時にだけ症状が見られますので、「時々スキップ様歩行をする」「時々足を上げる」等の症状が見られます。これが進行すると慢性的に症状を呈するようになります。膝蓋骨脱臼の併発症として多いのが前十字靭帯の断裂(詳しくは前十字靭帯断裂を読んで下さい)ですが、これにより症状はさらに重篤となります。

#### [ グレードの分類 ]

膝蓋骨脱臼は臨床的に以下の4段階に分類します。

- ・グレードⅠ ; 膝蓋骨を手で押すと脱臼しますが、手を離すと正常に戻ります。
- ・グレードⅡ ; 膝蓋骨を手で押すか、あるいは動物が膝関節を屈曲した際に自然に脱臼します。膝蓋骨は手で整復するか、動物が関節を伸展させるまで、脱臼した状態です。
- ・グレードⅢ ; 膝蓋骨は常に脱臼した状態ですが、関節を伸ばして手で整復することはできます。ただし、すぐに再脱臼してしまいます。
- ・グレードⅣ ; 膝蓋骨は常に脱臼した状態で、関節を伸ばしても手で整復することはできません。動物は歩行を嫌がり、かがんだ姿勢を取ようになります。また、O脚(内方脱臼の場合)あるいはX脚(外方脱臼の場合)と呼ばれる足の変形が生じます。

### 診断

触診により膝蓋骨の脱臼を確認し、グレードの分類をします。また同時に、頸骨の前方への動きがないかも確認します。この動きがある場合は前十字靭帯断裂の疑いがあります。

レントゲン検査 ; 股関節の異常に起因している場合もありますので、股関節を含むレントゲン検査を行います。グレードが進んでいる場合は、頸骨の湾曲・捻転、関節炎像がみられます。

### 治療

・グレードⅠ、Ⅱの一部 ; 体重制限と運動制限で維持可能です。関節軟骨を強化するサプリメントの投与も併用します。また、痛みが強い時には、鎮痛薬の投与を行います。ただし、これはあくまでも温存療法です。進行する可能性があることを把握しておいて下さい。

- ・多くのグレードⅢ、Ⅳ ; 手術による治療が必要になります。

## 手術内容

手術は、グレードにより内容が異なります。グレードが進んでいるほど手術も困難になり、以下に記載します手術項目が増えていくことになります。

- ・滑車溝再建術；膝蓋骨が収まる滑車溝を深くするための手技です。
- ・内側あるいは外側関節包の分離切開；内方脱臼の場合は内側、外方脱臼の場合は外側の分離切開を行い、内方あるいは外方へ引っ張る力を緩和します。
- ・外側あるいは内側関節包の縮合縫合；内方脱臼の場合は外方、外方脱臼の場合は内方の伸びてしまった関節包を切除し縫合することで、脱臼しづらくします。
- ・頸骨粗面の移動；膝蓋骨は膝蓋靭帯によって頸骨粗面に付着しています。膝蓋骨の脱臼によりこの頸骨粗面が内側あるいは外側に偏位している場合、正中に移動させる必要があります。この場合、骨切り術により頸骨から頸骨粗面を分離し、脱臼と反対側に移動させ、ピンにより固定します。

この他にも病態に応じて、特殊なテクニックを用いる場合もあります。

## 経過および予後

手術後は、通常1ヶ月間運動制限をします。特にジャンプは禁止です。手術による治療後90%以上の症例は、良好な経過がみられます。ただし、時間が経過しすぎて関節軟骨に重度な変性が生じている場合、術後の予後も悪くなります。適切な時期の処置が重要です。

## 飼主の方へ

先天的に膝蓋骨脱臼がある場合は、遺伝的要因によるものです。不幸な病気を増やさないうために繁殖に使用することはあきらめて下さい。